花見岡の大蛇済度

①「黒蓮華（生蓮華）」（茨城県下妻市下妻乙　光明寺所蔵）

花見岡の大蛇済度　（黒蓮華）

(1)「伝　花見ヶ丘　大蛇済度」より

人間の持つ嫉妬心をテーマに展開する大蛇済度。室の八島明神の宮司の子弥生の命が差し出されることになり困った宮司が夢告により親鸞聖人の教えを請うことになった。そこで聖人は教えをすぐさま受け取った健気な弥生を喜びつつも暴れる大蛇に十字名号を口に含ませると大蛇は今畜生道を免れたと涙ながらに紫雲に乗って去ったという。そこから降り下りた蓮華の花弁を小島に帰庵した聖人が十字名号とともに明空房に譲ったと伝えられている。

人の手のひらに乗せると静かに丸まるように動き出す。親鸞の足跡を訪ねる遠近の人々が、住職の本意に反してご要望が多い。ある時北海道から母を背負って同行の手のひらであまりに動くので絶句。「常憲院殿供御賢黒蓮華右之黒蓮華」と包紙に書かれている。「常憲院殿」とは第五代将軍徳川綱吉の法名である。徳川綱吉との関連は光明寺が御朱印五石を将軍から与えられていたことにあるのであろう。御朱印状が現存しており、江戸期における光明寺の歴史を研究する上で貴重な資料とされる。

(2)「十字名号縁起」より

ここに安置し奉る大蛇済度の御名号並びに生蓮華（いきれんげ）の由来を尋ねるに、昔、下野国都賀の郡室の八島に川合兵部という者が住んでいた。妻が長い間病気でふせっていたため、兵部は毎夜近くにある八島明神に詣で本服をいのったが、そうとは知らない妻は、夫に愛人が出来てしまったのでは、と疑心を起こし、嫉妬のあまりある夜、ひそかに夫の後を追った。妻は病身のため後を追ううちにのどの渇きをおぼえ、川辺で水をすくって飲もうとしたが、月影の下、水面にうつった自分の姿をみてびっくり。何と水面にうつったのは恐ろしい大蛇の姿をした自分だった。このため妻は驚き、悲しみのあまり川に身を投げた。この時以来、この川は思川と呼ばれるようになり、大蛇は付近の村々を荒らし回るようになった。

大蛇が村を荒らし回るのは、村々で人を食べれば三熱の苦しみからしばらく解放されるからだった。これ以上、村々に仇をなされては、と困った村人達は、相談の上、毎年抽選で十五歳以下の娘をひとりずつささげることを大蛇に約束した。

如何なる宿世の因縁か、ある年のこと八島明神の大宮司大澤掃部友宗の一子、弥生がくじに当たった。このため宮司夫妻は嘆き悲しみ、断食して明神

暮らしにじいーん　真宗大谷派東京教区
© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。

に娘の命を救いたまわん事を祈ったところ、明神が夢枕に立ち、「汝、娘の命を救いたいと祈れども、我が力にては叶うことはない。この難を逃れたいと思わば常陸の国小島におられる親鸞聖人は、あまねく苦悩の衆生を済度しているから招請して教えを請うべし。」と告げた。

宮司急ぎ聖人を招請申し上げ、親子諸共に弥陀超世の本願の教えを聞き取り、立ちどころに金剛堅固の信心を決定した。また弥生も父母に向かって申すには、果報つたなき身が大蛇の餌食となって死んでも宿業の招くところなれば悲しいということもありましょう。しかしすでに安養の浄土に往生していること疑いなき身なれば今は暫しの別れということですからお嘆きあらせるなと言えば、聖人も健気なる心をお喜びになり村人諸共に川の辺に連れ立って暫く相待つと大蛇水の上に躍り出て赤い舌を出し日月の如き眼を厳らし人々を一呑する様な有様だった。此の時聖人直ちに十字の尊号を投げつけたところ、大蛇その尊号を口に含み水底深く沈み、しばらくして今度はやさしい女の姿となり聖人に申し上げるには、「無量劫にも遭い難き真の知識の御教化にて今畜生道を免れ極楽へ往生することの有難さよ」と涙ながらに御礼申し上げ紫雲に乗って西の雲間に飛び去った。

その時空より蓮華が降り落ちて聖人自らこれを納め、茲に友宗親子は勿論、村人達も奇異の思いを込めてここを花見ヶ丘と名付けた。

その後聖人は小島草庵に帰り、蓮華並びに名号を明空房へお譲りしました。かかる不思議の霊宝ですので称名諸共に拝礼を遂げられますようお願いいたします。

(3)「生蓮華　由来記」(1960 年頃の資料)　より

今から約 740 年の昔、今の栃木県下都郡に室の八島明神という社があって、毎年 9 月 8 日が祭礼である。この祭礼には困った悪い風習があった。それは祭礼の前後、即ち 9 月 7 日の夜、氏子の中の小娘一人を御宮の池の端に檀を作って小娘を供えてその池に住んでいる池の主（大蛇）に人身御供に上げる風習である。それは毎年 6 月 20 日に氏子の中の13から15の小娘を御宮に集めて、クジを引いて当った小娘が人身御供に上げられるのです。それをしないと1年間附近の作物を荒したり、不作だったりするので、今迄何回となく加持、祈禱をしたが何の験もなかった。今年は此明神の神官の大沢掃部友宗の一人娘の照代がクジに当った。娘はもとより両親は「神も仏もないものか」と泣きの涙で食事さえものどを通らない。「天にも地にも掛替のない大事な娘、もう今年さえ通過したら良い婿養子を見立てて夫妻の杯をさせて、両親が老の楽と荒い風にも当てないで大切に育てた一人娘をみすみす大蛇に食わすとは何事だ。こんな事なら五年前の疱瘡で死んでしまったらあきらめがつくのに」泣口説いている。「若死をする子は器量がよいというが姿も形も人並みより勝れていて、その上丈夫に生まれついたのは何という因果な子だろう」と 3 人が夜昼通しで泣いて暮らしていた。

その頃、宗祖親鸞聖人は小島の三月寺に居られて慕って集って来た老若男女に、阿彌陀如来様の御本願や御誓願を誰にも飲み込める様に御説きになられるので日一日と参詣の人の数が増して行った。自然と此地方迄も知れ渡っていた時なので、神官夫婦は苦しい時は何とやらで、すぐ使いを立てた。使いが小島へ着いて恐る恐る事をわけて御願を申し上げますと聖人は御心よく御引受下さって、蓮位房、性信房の二人を御供に連れられて神官大沢掃部の宅に着かれた。大沢夫婦が涙乍らの御願「御方便がございましたらどうぞ御慈悲で千に一つでも娘の災難を遁れさせて助けて頂きたい」と申し上げますと聖人は親子に向かわれまして「何事も前の世の業です。殊に娑婆は無常迅速で、何時かは誰も逃れられないのは死ぬ事です。然し本来永劫に変わらないのは御救の親様阿彌陀如来様の御本願です。」と尚も二た時ばかり如来様の御謂を諄々と御説きになられました。真剣な御説法と、一言も聞漏らすまい

© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。

する大沢親子の心、直ちに御信心を頂いて感涙にむせびながら「唯今の御説法の尊い事は口にも筆にも云表わす事は出来ません。たとえ娘は大蛇に食われても一つも思い残す事はありません。どこで死ぬのかわからないのが世の習です。万一この尊い御法に値わせて頂かなかったら此世は勿論、あの世迄鬼の食物になるのに何と云う有難い御本願でしょうか」と御恩報謝の御念仏が親子の口から止めどなく称え続けられてその日を過した。最早９月７日になると、哀れ娘は白装束に着替えて縁者や村人たちに送られて牲の檀についた。日も暮れたので尽きない名残りを後にして照代は見送りの人達と涙の別れをしたが、両親は眠れるどころではありません。一晩中念仏を称えて過した。夜中に何回となく「いくら尊い御念仏でも、あの極悪非道の大蛇には通じまい。さぞや今頃は、可愛い娘は大蛇に食べられて苦しい苦しい悲鳴をあげているのではなかろうか。今頃は娘の体はなくなっても髪の毛一本でも池の水に浮かんでいたらなア」と泣きの涙の繰言で夜が明け始めた。白々と夜が明け始めたので、両親、縁者はもとより村人迄、吾勝にと御宮の池の牲の檀の近くへ馳け付けて見ると、いつもは小娘の姿が見えないのに、今年ばかりは高々と御念仏を称えている小娘照代の姿が皆の目にはっきりと見えた。喜んだのは両親ばかりではありません。照代の姿を見た誰もが飛上る程の喜び様だ。誰もが夢ではないかと喜び合った。両親が娘にすがりついて「よかった　よかった、よかった、よく活きていてくれた。よかった、よかった　よかった」両親は娘を抱く様にして家へ連れ帰った。娘は座敷へ上って聖人に恭しく御礼をして「夕は両三回大蛇が出て来ました。私はたとえ大蛇に食われても、未来は御浄土、行先は如来様の御膝元へと唯々御念仏で一晩過しました。大蛇が来る前には生暖かい風が吹いたと思うと、池の水に大波がたって池の中程に御月様程の大きな光が二つ出てその中に大蛇が恐ろしい口を開けて一間位近く迄来ました。頭に二本の角を立てて真赤な火を吹いて私に近づきました。然し私は大蛇に食われようと何にかまれ様とも、行先は安養の極楽様と一心不乱に御念仏を称えていましたら、三回供大蛇は池の中に引込みました。お父さん、お母さん、聖人様、妾は嬉しうございます。」と初めて娘は母親の膝の上に泣き伏しました。居並ぶ人誰一人喜びの涙に咽ばない者はありませんでした。漸くして父親は娘の背中を撫でながら「こうして一人娘が大蛇に食われずに帰れたのも皆如来様の御力、御念仏の御利益です。」と繰返し繰返し喜んだ。これを見、これを聞いた村人達は会合して相談の結果、聖人に「村人達を悩ますこの大蛇を是非々々済度して頂きたい。」と御願を申し上げますと、聖人は「私の力は及ばなくても仏様が御済度下さいます」と云って、先に娘照代の座った牲の檀に上られて、池に向って座を占められました。漸く池に向って合掌御念仏なされて居られましたが、徐に御口を開かれました。「はっきりと良く聞きなさい。私が今から汝の為に済度の妙法のお話をします。然しその前に蛇道に通力があったら、大蛇になる前の姿で出なさい。そして私と話合をしましょう」と申されると池の波の中から一人の女があらわれました。聖人は「どうして汝は大蛇になられたのですか」と申されると、この女は聖人に御礼をして「恐乍ら妾の前生は、この附近の村の者で、生まれつき嫉妬心が深くて嫁となって間もなく体が弱いので夫に見捨てられて、其の上夫は他に妾を持っているのでその妾と仲が良いのを見て、嗚呼口惜しい、悲しいと怒る心や怨む心が日増に募って、何とかしてこの恨を晴そうとひそかに夫の部屋に入って憎さも憎しの一念で夫ののどに喰いついた上、罪もない妾迄喰い殺しました。その血が私の体にかかると忽ち天罰は怖しいもので、体中が急に燃える様に暑くなって生きていながら阿鼻地獄や焦熱地獄の様な苦しみで七転八倒しながら漸く此所迄来て水を飲もうとすると浅間しい事です。池の水に写っている私の姿は生乍ら畜生道に落ちてか蛇の形になって、三熱の苦しみは休む間もなく私の体を苦しめます。この苦しみを逃れるのは一年に一度小娘の生血を吸う事です。ですから罪も報も忘れてしまって今迄沢山の小娘を喰殺して

暮らしにじいーん　真宗大谷派東京教区
© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。

漸く三熱の苦しみを逃れていたのでございます」と長々と聖人に申し上げると、聖人は「こうして妾の体を苦しめ、其の上沢山な娘さんを殺していては、何百年何千年経っても妾の苦しみは逃れません。ですから私が今から阿彌陀如来様の御本願の御力で成仏できる様にして上げます。心を静めて御聞きなさい」と申されると、女の姿は水の中へ吸込まれるように消えました。そして聖人は村人達に「手頃の小石を洗清めて私の側へ集めて下さい」と申されました。村人達は忽ち多数の小石を聖人の膝近くに集めました。徐に浄土三部経を読上げ始められました。そして御経の一字一字を小石に書いては池に投込み投込みして三日三晩休む間もあられませんでした。第四日目の朝、空に微な良い香の風が起ったと思う間もなく、池の水の上に白い雲が湧いて、その雲の上に仏様の姿になった女が立っていて、聖人に深々と御礼をして「有難うございました。私は本当によい御方に御目にかかって貴い御法を頂いて、其の上御経様と御念仏の功徳によりまして、畜生道の苦を遁れて、今極楽往生の果報を頂いて喜びに耐えません。有難うございました。忝うございました」と聖人を忝しく拝礼して大空に昇って行きました。此時とても良い香が四方に漂って紫の雲が棚引いて数枚の蓮華が散りました。この蓮華がその時のです。この不思議を見た一同は言合したように高らかに何時迄も何時迄も御念仏の声が続きました。すると池の水面に長い長い大蛇の死がいが浮上りました。まだまだ御念仏の声が続いています。

皆さん阿彌陀如来様は何とかして、又どんな縁がで御浄土へ愚痴蒙昧の私達、罪業深長の吾々を救わにゃおかんの御誓願、必ず救う御本願で御浄土で立ちづくめで呼びづめに御呼かけでございます。

これを御縁に家中揃っての御念仏の日暮をさせて頂く身になりましょう。

②「大蛇の頭骨」

（茨城県結城郡八千代町新地　弘徳寺所蔵）

花見岡の大蛇済度　（大蛇の頭骨）

(1)「親鸞聖人花見ヶ岡大蛇濟度ノ縁記」より

当山弘徳寺に伝来の蛇骨は、第八十四代天皇順徳院の時代、建保年間に親鸞聖人が下野国花見ヶ岡にて済度されました大蛇の頭骨です。

その由来を尋ねてみますと、高田専修寺に伝来している御絵伝に花見ヶ岡の大蛇済度の場面が現されています。

この大蛇済度のお話は以下の通りです。

昔、下野国都賀郡大光寺村に川合兵部という者

暮らしにじいーん　真宗大谷派東京教区
© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。

が住んでおりました。兵部の妻は嫉妬深く貪欲な性格であったため兵部は妻に愛想が尽きてしまい、密かに妾を囲っておりました。この妾はとても美しく、優しく素直な性格であったため、兵部は妾を寵愛し妻の目を盗んでは日夜妾の許に通っておりました。

一方、妻は兵部が妾の家に通っていることに早くから気付いており、嗚呼口惜しい、悲しいと怒る心や恨む心が日増しに募り、何とかしてこの恨みを晴らそうと思いながらも日々平穏を装って暮らしておりました。

妻が陰鬱な気持ちを隠して生活していることを兵部も察知しており、いつしか妻を疎ましく思うようになっておりました。

ある夜のこと、夫婦喧嘩の末に兵部に強く殴られた妻の心に忽ちのうちに復讐の心が沸き立ち、胸に秘めていた怒りの炎が燃え盛り、あの女を食い殺そうと妾のところに駈けて」行き、一思いに女に襲い掛かろうとしたところを兵部が邪魔をしたため、夫の喉元に喰らい付き、逃げ惑う女を打倒し思い知れよと喰い裂けば二人とも死んでしまいました。

二人を喰い殺し喜んだのも束の間、二人の返り血を受けた妻は、体中が急に燃えるように熱くなり阿鼻地獄や焦熱地獄の様な苦しみで七転八倒し、黒川を越え二十丁（約 2km）ばかりを行き過ぎ、苦しみに耐えかねて水を飲もうと川辺に近付くと、これはどうしたことでしょう？頭上には二本の角が立ち、口は耳元まで裂け、体は鱗が逆立ち、それはそれは恐ろしい姿へと変貌を遂げた妻の姿が水面に写りました。そんな経緯によりまして、いつしかこの川は姿川と呼ばれるようになりました。

妻は再び黒川へ戻り、碧藍（へきらん）色の水面に向かいこの世に女が居るから嫉妬の心も起こるのだ。ここに身を沈めて、あらゆる女を取殺してこの怒りを静めようと水中に飛び入った為に、後にこの川は思川と呼ばれるようになりました。

そうして妻は廿尋（はた）（約 36 m）の大蛇へと姿を変え、近隣の村々に荒れ出ては住人に毒気を吹きかけて取喰うようになり、犠牲者は夥（おびただ）しい数に上り村人たちの愁いの元となりました。

村人たちは神職に頼んで、この大蛇を宥（なだ）めるために沖神として祀り、毎年一人の女子を人身御供として差し出す替わりに他に害を及ぼさないことを約束しました。それより後は毎年六月二十日に近郷三十七ヶ村より十歳以上十五歳未満の女子を集めくじ引きにて一人を選び、九月八日の夜思川のほとりに犠の壇を設けここに人身御供として献げることとしました。こうすることによって近郷の村々に害は及ばぬことになりました。

ある年、悲しい事に人身御供のくじが、その宮持の神主下野国都賀郡室の八嶋の大沢掃部正友宗（おおさわかもんのかみともむね）の一人娘で、今年十五歳になる照代に当たってしまいました。神職である友宗は加持・祈祷によって何とか娘を人身御供に差し出さないで済むようにと丹誠を凝らしましたが何の験（しるし）もなく、いつしか祭礼の日も近付き、親子三人は夜昼泣いて暮らしていました。

しかし幸いなことに、その頃宗祖親鸞聖人は下総国小島の草庵にて、慕って集まってきた老若男女に阿弥陀如来の御本願や御誓願を誰にでも解り易く御説きになっておられました。

人伝に聖人の噂話が下野国にまで伝わってきていましたので、友宗は藁にもすがる思いで聖人のもとを訪ね、これまでの経緯を話し、「遠いところ誠に申し訳ありませんが、どうか我が家にお越しいただき、娘を救って頂きたい」とお願い申し上げましたところ、聖人は快く引き受けて下さり、お供と共に友宗の家に赴き、友宗親子に対して「何事も前世での業の故でありますので、今更後悔しても取り返しの付かないことです。もし仮にこの度の人身御供の何を逃れられたとしても、無常迅速の娑婆世界においては、露よりも儚きものが私たちの命でありますので、明日のわが身がどうなるか、先のことは誰にも分からないのです。目前の災禍を逃れることをいくら考えても、いずれ死に行く我が身からは誰も逃れることはできないのです。だからこそ、苦難から逃れることを考えるのではなく、一時も早く未来永劫に変わることのない弥陀の本願を信じ、ただ一向に念仏する

暮らしにじいーん 真宗大谷派東京教区
© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。

べきである」等々と懇ろに御教化なされました。

照代は聖人の御説法により、直ちに御信心を頂いて感涙にむせびながら「ただ今の尊い御説法によりまして、例え我が身が大蛇に咬み殺されてもこの世に思い残すことは何一つありません。その時こそ安養の浄土に生まれ変わることになんの疑いもありませんから」と、尊い御法に出逢わせていただいたことに感謝し、その日より報恩の念仏を断やすことなく祭礼の日を心待ちにしておりました。

そして当日になり照代は潔く両親に別れを告げ、杉葉の輿に乗せられ縁者や村人に送られて川辺に構えた犠の壇に登りました。日も暮れてきて、尽きない名残を残して涙の別れを告げました。照代は一人壇上に端座し報謝の念仏も今宵限りと心静かに念仏を称えておりました。友宗夫婦も哀れな娘に思いを馳せ一晩中念仏を称えて過ごしました。

夜も丑満を過ぎた頃、烈しい風雨の中より廿尋の大蛇が姿を現し、火炎を吹立て紅の舌を巻き上げ、今まさに娘を一呑みにしようとした時に、照代は今こそ臨終の時と一筋に念仏を称えれば、大蛇は念仏の御威徳に恐れをなし水底に沈んで行き、不思議なことに浪風も収まりました。照代は遂に念仏の功徳に依り大蛇の難を逃れたのでした。

そうして白々と夜も明け始めた頃、友宗夫婦は兼ねてより覚悟の上とは言いながらも娘の身の上を案じ、せめて無き跡だけでも見届けようと川辺に来てみれば、壇上にて念仏を称えている照代の姿が見えました。夫婦はとても喜び、嬉し涙と共に照代を家に連れ帰りました。

照代は座敷に上って聖人に昨夜の出来事を報告しましたところ、聖人もとても喜んで下さり「念仏の行者は満徳を具するゆえ佛菩薩常に照護あれば、悪蛇悪鬼も近寄らずとは佛の金言なり」等々とお話下さいました。照代は本願の広大なることを喜び、聖人に剃髪を願い出て法名を念妙と賜りました。

この度の出来事は、たちまちのうちに人々に広がり、遠近老若を問わず聖人への御帰依を渇仰する者多く、邪険を翻し疑惑を晴らして念仏門に帰入する者が後を絶ちませんでした。

友宗を始め村の人々が聖人に大蛇の済度を願い出たところ、聖人は「私は降魔の法は知りませんが、仏誓の功徳によって大蛇が助ることもあるでしょうと」件の池の辺に草庵を結び小石を集め、一石一字の三部経妙典を書き写し水中に投げ込み、蛇身であっても経文の功徳を得て仏勅を受けよ、どんな姿であっても阿弥陀如来の誓願のある上は悪逆のものこそ浄土の正客である、と詳しく説き聞かせ七日七晩妙典読誦を続けたところ七日目の夜、大蛇は水上に姿を現した。その時聖人が南無不可思議光如来の九字の名号を大蛇に投げつけたところ、大蛇はその名号を口にくわえて水底に沈んでいった。

こうして大蛇は念仏の功徳に依り命終えて菩薩の相となり池の中より出でて西方に飛び去っていった。この時、空より音楽が聞こえ、とても良い香りが四方に漂い、西方より紫雲がたなびき珍妙なる花が降り下りました。この不思議な光景を目にした人々は稀有最勝の名願を仰ぎ稱名念仏の声が何時までも山野に響き渡りました。

この時蓮華の花びらが降り散ったので聖人がこの地を花見ヶ岡と名付けられました。

その後、当寺の開基信楽房は、悪人正機の弥陀の本願は鬼も大蛇も隔てなく願力の不思議にて往生する、ということも五濁増時多疑謗と末代の者は他力往生を疑う人も出てくることでしょう。依って悪人女人往生の鏡と大蛇の頭骨を後世に残し、当寺の宝物として永く後世に残すこととされました。

そうすることによって、この蛇骨を目にした者が大蛇に等しき我が身であると思い知る事となり、弥陀超世の悲願に助けられ命終わり次第極楽往生を遂げさせて頂けることの有り難さよと稱名念仏と共に法義相続されていくことが何よりも肝要である。

あなかしこ　恐ろしき大蛇も今は弥陀たのむ末の女子も御名をとなえよ

暮らしにじいーん 真宗大谷派東京教区
© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。